

单士釐が来日初期に見た風景：『受茲室詩稿』を手がかりに

稲森, 雅子
九州大学大学院人文科学研究院文学部門：助教

<https://doi.org/10.15017/4372025>

出版情報：文學研究. 118, pp.1-38, 2021-03-07. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

単士釐が来日初期に見た風景——『受茲室詩稿』を手がかりに——

稲 森 雅 子

はじめに

清朝末期、中国人女性が国外に赴くことは極めて稀であった。その二十世紀初頭、数年間を日本で過ごした知識人女性がいる。外交官錢恂（一八五三―一九二七）の妻、単士釐（一八五八―一九四五）である。夫の日本赴任中、何度も日本と中国の間を往来した。この間、日本語書籍の翻訳に挑戦したほか、夫のロシア出張にも同行し、中国人女性初の海外旅行記とされる『癸卯旅行記』三卷¹を著した。その後もライフワークとして、清朝の女流文人の目録を編み、詩歌の創作を続けた。単士釐は、まさに当代屈指の開明的な才媛であった。

我が国における単士釐研究は、『癸卯旅行記』を主材料としてすすめられてきた。谷川栄子氏は女性史の視点から、蕭燕婉氏は文学面からアプローチされている²。さらに先年、鈴木智夫氏による訳注本も刊行された³。中国語圏においても、邱巍氏や劉又瑄氏がその生涯や著作に関する研究成果を公刊するなどした⁴。しかし、来日初期の活動や、単士釐にとって不可欠の糧であった個々の詩については、なお検討の余地があるように思われる。日本滞在中の作品については、蕭氏が一部言及するのみで、詳細な考察は殆ど見られない。これらの詩を読み解くことにより、来

日初期の单士釐の行動や心情のみならず、中国人外交官錢恂・单士釐夫妻の暮らしぶりや交際関係の一端を明らかにできるのではないだろうか。

本稿では、日本滞在初期、すなわちロシア出発前の作品に絞り検討する。单士釐は、いつ、どこを訪れ、何を見聞きし、どのように描写したのだろうか。また、錢恂・单士釐夫妻は、どのような人々と行動をとりにしていたのだろうか。あわせて、日本語の習得経緯に留意し、彼女の日本語教師が誰だったのかについて、仮説を提示してみたい。

一 单士釐とその家族及び『受茲室詩稿』について

はじめに、单士釐とその家族について、簡単に確認しておこう。

单士釐の字は受茲⁵⁾、浙江蕭山（現在の浙江省杭州市蕭山区）の人である。单家は、いわゆる知識人の家柄で、父の单恩溥は一八六二（同治元）年の举人で、従弟の单不庵（一八七八〜一九三〇）は北京大学国文系教授、浙江省立図書館主任などをつとめた人物である。母方の許家も知識人家庭で、单士釐は父のほかに、母方の伯父許壬伯にも教えを受けている。

单士釐は、一八八四（光緒十）年、錢恂と結婚した（錢恂は再婚）。錢恂は、一八九〇年より外交官として欧州に赴任したが、单士釐はその間も錢家に残り、息子の錢稻孫（一八八七〜一九六六）、穉孫（一八九〇〜一九三六）に自ら基礎教育を授けた。一八九九年、夫の赴任に伴い初来日し、前述のとおり日中間のたびたび往来し、一九〇三〜〇四年にはロシアへの長期出張に同行した。一九〇七年に日本を離れ、一九一〇年まで欧州に滞在して帰国した。その後は、夫や息子達とともに暮らした。

単士釐の文藝活動は、多岐にわたる。日本滞在中は、先述の『癸卯旅行記』のほか、『單騎遠征録』を手始めに日本語書籍の翻訳に挑戦し、下田歌子『家政学』と永江正直『女子教育論』を翻訳して出版した。ライフワークとして編んだ女流詩人の目録『清閨秀藝文略』五巻は、三千余人を採録し、清朝女性文学史研究の基礎資料として評価されている。生涯を通じて折々の心情や出来事を詩歌に詠み、『受茲室詩稿』三巻を残した。

夫の錢恂は、字が念劬、浙江吳興歸安（現在の浙江省湖州市吳興区）の人である。錢恂の父錢振常（一八二五―九八）と伯父の錢振倫（一八一六―七九）はともに進士に及第した才子であった。錢振倫の義弟は、光緒帝に仕えた翁同龢（一八三〇―一九〇四）である。また錢恂の末弟の錢玄同（一八八七―一九三九）は、北京大学教授などをつとめた言語学者で、文学革命や文字改革の主導メンバーの一人として活躍した。

長男の錢稻孫は、日本との文化学術交流に心血を注いだ。日本で中等教育を受けた帰国子女で、清華大学などで日本文学や日本史を講じたほか、『万葉集』や近松門左衛門、志賀直哉の作品などを翻訳した。吉川幸次郎ら日本人留学生と親しくなり、目加田誠らを自宅に下宿させたりもした。さらに、自宅に日本語図書室「泉寿東文書庫」を設けたこともある。日中戦争中には、所謂「偽北京大学」図書館長などの職にあったため、のちに「漢奸（売国奴）」とされて有罪となり、文化大革命の嵐の中でこの世を去った。それゆえ、錢稻孫宅にあった書籍や資料は散逸してしまつたようである。単士釐研究の開始が、一九八〇年前後まで遅れた理由もここにあるだろう。

また、錢稻孫の妻の包豊保は、同郷の貢生包嚴生の娘である。一九〇〇年に結婚して来日し、下田歌子が開校したばかりの実践女学校（のちの実践女子大学）初の中国人留学生となった。これも、単士釐が日本の女子教育に関心を持ち、下田歌子らと交際した一因と推測される。

このように、単士釐とその家族は、典型的な知識人であった。

次に、詩集『受茲室詩稿』について簡単に紹介しておきたい。単士釐は先述のとおり、生涯詩作を続けた。しか

し、生前詩集を編むことはなく、専ら手元に手稿を残すのみであった。『受茲室詩稿』の底本は、一九四二年に単士釐が羅守撰（羅振玉の姪）に贈ったものである。没後四十年を過ぎた一九八六年、この手稿をもとに翻刻して出版された。幾多の社会混乱を経て残った貴重な資料と言える。¹² 詩集は三卷、一八三題、三〇二首で、親族友人かの唱和詩三十題、七二首を付し、おおむね製作年代順に並べられている。各巻の内訳は、巻上が五十題、八六首（付詩二題、五首）、巻中は三八題、九五首（付詩二題、三二首）、巻下は九五題、二二一首（付詩二六題、三二六首）である。日本滞在期間の詩は、巻上及び巻中に収められている。このうち、巻中は、ロシア出張以降の作品であるとみられる。本稿では、『受茲室詩稿』巻上のうち、ロシア渡航以前に日本で詠まれたと思われる作品、十題十一首（付詩一題一首）を対象に考察をすすめる。¹³

二 単士釐と錢恂の動向について（初来日からロシア出発まで）

まず、詩作時期検討の前提として、初来日からロシア渡航までの錢恂・単士釐夫妻の動向、とりわけ日中間の往來履歴を確認しておきたい。既に多くの指摘があるように、当時、中国人の既婚女性が、面識の浅い日本人と単身で交際したり、日本国内を観光することは非常に難しかった。従って、錢恂の行動歴が、単士釐の動向と直結していると思われる。

錢恂は、一八九五（光緒二十一年）年に欧州より帰国し、張之洞（一八三七～一九〇九）の幕下に入って、湖北や上海で公務にあたっていた。上司の張之洞は、直隸南皮（現在の河北省滄州市）の人で、曾国藩、李鴻章、左宗棠とともに「四大名臣」と称された重鎮の一人である。洋務派官僚として知られ、当時は湖広総督をつとめていた。

以下に示す略年譜は、高木理久夫編・呉格訂「錢恂年譜（増補改訂版）」¹⁴に基づく。このほか、新たな資料とし

て、『近衛篤磨日記』¹⁵とアジア歴史資料センターウェブサイトを参照した。近衛篤磨（一八六三～一九〇四）は、アジア主義の立場から日清同盟を唱え、一八九八年六月に同文会を組織したばかりであった。年譜は、「錢恂年譜（増補改訂版）」によるものは明朝体、それ以外はゴチック体にて記す。また、新暦を基本とし、弧括内に旧暦を付す。

一八九八（光緒二十四）年

九月十六日（八月一日）

錢恂が光緒帝に謁見。

年末～年始

この頃、錢恂が湖北省留學生に帯同し日本へ渡航。

一八九九年

三月二十二日（二月十一日）

錢恂が張之洞より遊學日本學生監督に任命される。

六月十六日（五月九日）

単士釐が東京に到着。¹⁸

八月二十三日（七月十八日）頃

錢恂が上海に戻る。

同月

東京大同學校が設立され（犬養毅校長）、錢恂が學生の監督にあたる。

九月十七日（八月十三日）

錢恂が日本の漢口領事館を訪問する。¹⁹

九月十九日（八月十五日）

錢恂が帯同した留學生三名が東京専門學校（現早稲田大學）に入学。

十月二十一日（九月十七日）

錢恂が留學生四十六名（一週間後の第二便三十五名）を引率して上海を出発。²⁰

一九〇〇年

一月十日（一八九九年十二月十日）

錢恂が学習院にて近衛篤磨と面会（小林光太郎²¹同席）。

一月二十三日（二月二十二日）

錢恂、単士釐夫妻が鎌倉付近に居住。

四月十九日（三月二十日）以降

錢恂が湖北に戻る。

五月十九日（四月二十一日）頃 錢恂が横浜に到着。

※六月二十日～八月十四日（五月二十四日～七月二十日）義和団事件北京籠城。

六月二十七日（六月一日）張権ら主催の宴会に近衛篤磨が招待される。錢恂同席（紅葉館、七十余名）

六月二十八日（六月二日）錢恂が大本宮陸軍参謀宇都宮太郎陸軍大尉と会談。

七月五日（六月九日）錢恂が近衛篤磨宅を訪問、張之洞への伝言を預かる（中西正樹同席²²）。

七月十七日（六月二十一日）錢恂が近衛篤磨宅を訪問（萩村錦太²³、中西正樹「通訳」ら同席）。

八月十六日（七月二十二日）錢恂が近衛篤磨宅を訪問（萩村錦太、中西正樹同席）。

一九〇一年

一月九日（一九〇〇年十一月十九日）錢恂が病気を理由に監督官を辞職（直前に張之洞より帰国命令）。

四月 錢稻孫、穆孫兄弟が慶應義塾に入学²⁴。

九月八日（七月二十六日）近衛篤磨が錢恂からの書状を受け取る（九月五日、鎌倉より発信）。

九月十六日（八月四日）錢恂が華族会館にて近衛篤磨と会食（岸田吟香ら同席）。

九月十九日（八月七日）『東京朝日新聞』が中国人女子初の留学生は、錢恂の娘であると報道。

十二月二十三日（十月十三日）錢恂が張之洞より湖北交渉委員を委任される。

一九〇二年

五月十四日（四月七日）以前 錢恂が東京にて安田善次郎（安田財閥の祖）と交渉。

八月二日（七月一日）頃 錢恂は英清通商会議陪席のため上海に滞在。

十一月十五日（十月十六日）錢恂が留学生三十三名とともに横浜に到着。

（この後、帰国）

一九〇三年

二月十六日（一月十九日）

錢恂が上海より長崎に到着。

三月十五日（二月十七日）

錢恂・単士釐夫妻がロシアに向け東京を出発。

単士釐は、錢恂より約半年遅れて一八九九年六月（新曆記載、以下同）に来日した。その後は、夫と行動を共にしたと思われ、⁽²⁶⁾ロシア出發まで間に四度（帰国時期Ⅱ一八九九年八月、一九〇〇年四月頃、一九〇二年八月頃・同年末頃）往来したようである。

一九〇〇年五月から一九〇二年八月頃までの二年余りは、夫妻が最も長く日本に居住していた時期である。このとき錢恂は、多くの留學生を引率していた。加えて、来日直後に義和團事件が起きた。上司張之洞の指示により情報収集に奔走し、近衛篤磨にも面会した。この間に、自身の子女を日本の教育機関に入学させている。

複数の先行研究で指摘されたように、単士釐は、ロシア旅行の時点で日本に対し大いに好感を抱いていた。従って、一九〇〇年五月から二年余りが、単士釐の日本觀形成過程において重要であったと思われる。

単士釐は、この間、日本のどこで、どのような体験をし、どのような感想を持ったのだろうか。以下、『受茲室詩稿』所収詩のうち、ロシアへ出發するまでの作品について考えてみたい。

三 対象詩の基本情報について

今回対象となる詩十首について、『受茲室詩稿』の掲載順に基本的な情報をまとめると、左表のとおりである。便宜上、詩題上部に片仮名記号を付した。以下本稿中で略称記号として用いる。また、創作時期を明示しない作品に

ついでには、関連詩及び年譜等により筆者が推定し、括弧を付し記載した（推定理由は後述する）。

	詩 題	詩 型	創作年・月	主題地	頁
ア	庚子四月十八日舟泊神戸 游塔之沢宿福住楼之臨溪閣	七言四十句 五言律詩	一九〇〇・五 (一九〇〇・四)	神戸 箱根	21
ウ	日光山紅葉 汽車中間児童唱歌(明治三十二年)	七言律詩 七言絶句	未詳 一八九九	日光 未詳	23
オ	偕夫子游箱根(初見電車)四首 二十世紀之春、偕夫子住鎌倉日游各名勝、用蘇和王勝之 游鐘山韻	七言絶句 五言二十句	(一九〇〇・四) 一九〇一・二	箱根 鎌倉	24
キ	庚子秋津田老者約夫子偕予同游金沢及横須賀	五言九十二句	一九〇〇・秋	金沢(横浜) 横須賀	25
ク	江島金龜楼餞歲歩積頭歩斎主人原韻(付錢恂詩一首)	五言五十四句(同右)	一九〇一・一	江ノ島	27
ケ	辛丑春日偕夫子陪夏君地山伉儷重游江島再歩前韻	五言五十四句	一九〇一・二	江ノ島	31
コ	題金沢八景(八首) 洲崎晴嵐、瀬戸秋月、小泉夜雨、乙鑑扁帆、称名晚鐘、 平潟落雁、内川暮雪、野島夕照	五言絶句	(一九〇〇・秋)	金沢(横浜)	33

(注) 頁は、『受茲室詩稿』掲載開始頁を示す。

作品は、日本到着以降のおおよそ創作時期にしたがって配列されるが、一部に時間的な前後がある。また、詩型もさまざまである。登場人物に関しても、配列の意図はないように思われる。

これら十作品のうち、江ノ島を詠んだ（ク）と（ケ）の二首のみが、単士釐が存命中に公にされた詩である。共通する錢恂の原詩に和した作で（七言五十四句、一韻到底）、錢恂の作品とともに、翌年二月に『浙江潮』第二期の文苑欄に掲載された（若干の異同あり）。それぞれ、錢恂は「富士始一」、単士釐は「受茲室主人」というペンネームを用いている。単士釐作品は、夫の作品の直後に掲載されている。錢恂が一首であるのに対し、単士釐は二首であることから、作品の出来栄えに、単士釐がそれなりの自信を持っていたと推測される。掲載詩の詩題に若干違いがある。『受茲室詩稿』と『浙江潮』とを比較すると、左表のとおりである（相違のある部分は、傍線、ゴチック体で記載した）。

単士釐		錢恂
(ケ)	(ク)	
儂重游江島再歩前韻	辛丑春日偕夫子陪夏君地山伉人原韻	【受茲室詩稿】 記載なし
春日偕積躑步主人及夏地山夫婦又循蘭再游江島再歩原韻（春日積躑步主人及び夏地山夫婦又た循蘭と偕に再び江の島に遊ぶ、再び歩に原韻す）	江島金龜樓餞歲和積躑步主人元韻（江の島金龜樓にて歳を餞る、積躑步主人元韻に和す）	【浙江潮】 庚子陰曆除夕述懷時在日本（庚子陰曆の除夕に述懐す、時に日本に在り）

二つの詩題を比較すると、『浙江潮』の方が詳細で意味も取りやすいようである。なお、「積躑步齋」は錢恂の室名の一つである（『受茲室詩稿』（ク）の「積躑步齋」の上の「歩」は誤記の可能性がある）。

ここからは、創作時期が詩題に記載されていない作品について、創作時期を推測してみたい。

はじめに、箱根に取材した（イ）と（オ）をとりあげる。これらは同時期の体験を詠んだもので、一九〇〇年四月下旬に帰国する前の作と思われる。同時期の作品とする理由は、時期と場所による。

箱根は、一八七七年に富士屋ホテルが開業するなどして、外国人にも人気の観光地となっていた。箱根の小田原馬車鉄道は、電化工事がすすめられ、一九〇〇年三月二十一日より、国府津―湯本間が全線電化された。(オ)の詩題に「初見電車(初めて電車を見る)」とあるが、単士釐が初めて電車に乗ったことだけではなく、電気鉄道が開通直後であることを意味しているのではないだろうか。この年、単士釐一行は、四月中旬に帰国している。銭恂の立場を考慮すれば、清国代表の一人として、電化直後に銭恂夫妻が招かれた可能性もあるだろう。

(イ)の詩題に記す「塔之沢温泉」は、箱根七湯の一つで、(オ)に詠まれた鉄道の終点の湯本駅からほど近い位置にある。すなわち、二首の創作地はつながっているのである。「福住楼」は、塔之沢温泉で一八九〇年に開業し、福澤諭吉、夏目漱石ら多くの文人も常宿とした旅館である。当時の建物は、現在の場所より約二百メートル上流にあったという。²⁸⁾

本詩第四首の第二聯に、製作時期を推測しうる情報がある。

天気 天气 天气 天气
天气 天气 天气 天气
天气 天气 天气 天气
天气 天气 天气 天气

麦秋 麦秋 麦秋 麦秋
麦秋 麦秋 麦秋 麦秋
麦秋 麦秋 麦秋 麦秋
麦秋 麦秋 麦秋 麦秋

湯本駅の標高は約百十五メートルにあり、平地よりやや気温も下がる。福住楼に宿泊した翌朝の冷え込みを「互寒(「氷るほどのきびしい寒さ)」と表現する。第四句では、山を降りた平野の景色を詠む。「斯箱」は『詩経』に出典があり、穀物が豊作であることを意味する。育ちゆく若麦の豊かな緑を目にして、豊作を一足早く祈ったものと思われる。このように、朝晩の気温が低さ、麦刈りに早い景色を詠んでいることから、晩春の作と推測される。

加えて、(イ)第四聯に「愧未解東文(愧づらくは未だ東文(「日本語」を解さず)」とあり、単士釐はまだ日本

語を理解できないことを悔やみ、学んでみたいと思いついていたことがわかる。後述するが、単士釐は、一九〇〇年秋から日本語を学び始めている。よって、本詩は、それ以前の作品ということになる。

以上のことから、(イ)と(オ)は、一九〇〇年三月末から四月初めのころ、箱根電気鉄道で箱根湯本へ行き、福住楼に宿泊した時の一連の作品と推測できる。

次に(ウ)をみてみよう。これは、一九〇〇年または翌年の作と思われる。

詩題より日光に紅葉狩りに訪れたことがわかる。日光は、アーネスト・サトウ (Sir Ernest Mason Satow) がガイドブック『日光案内』³⁰で紹介して以降、外国人への認知度も向上していた。³¹

日光の紅葉時期は、例年十月中旬～十一月である。単士釐が、初来日からロシア出発までの期間で、紅葉の季節に夫とともに日本に滞在したことが確認できるのは、一九〇〇、〇一年の二回である。一八九九年はいったん夏に帰国し、十月末に留学生八十余名を引率して再来日している。来日直後は、留学生対応のため、観光に出掛ける余裕はなかった可能性が高い。よって、一八九九年は対象から除外した。

最後に、(コ)八首を検討する。これらは一連の作品で、(キ)と同じく一九〇〇年秋を詠んだものと思われる。金沢八景は、瀟湘八景に倣った八景の一つである。江戸時代、水戸光圀の庇護を受けた渡来僧の東臯心越(一六三九～九六)が、八景を一望できる能見堂にのぼり、故郷の瀟湘八景を懐かしんで七言絶句を詠んだことから、多くの文人達に知られるようになった。歌川広重の浮世絵『金沢八景』も著名である。

(コ)には、「秋空」(瀬戸秋月)、「紅葉」(称名晚鐘)、「秋色」(平潟落雁)など、秋の夕暮れが多く描かれる。また、(キ)でも、夕暮れの時間帯に金沢八景の遊覧しており、(コ)と情景が共通する。ゆえに、(キ)と(コ)は同時期、すなわち一九〇〇年秋に詠んだものと推測する。なお、『癸卯旅行記』には、一九〇二年四月に金沢で牡丹を觀賞したとの回想がある。³²しかし、牡丹の開花時期は、四月下旬～五月であり、(コ)とは季節が合わない。単士釐

は金沢の風景を気に入り、一九〇二年初夏に再び訪れたと考えられる。

さて、ここであらためて、詩の舞台となった場所をみると、いわゆる観光地が多い。具体的に地名をあげると、神戸（ア）、箱根温泉（イ、オ）、日光（ウ）、鎌倉（カ）、横浜市金沢（キ、コ）、江ノ島（ク、ケ）である。神奈川県が大半で、東京都心を詠んだものは見当たらない。

これは、（カ）の詩題に明示されるように、彼女が鎌倉に居住していた時期が相当程度あったことに起因するだろう。先行研究により、錢恂は、当初、留学生対応のため、東京の牛込に住まいを構えていたが、一九〇〇年二月の時点では、鎌倉に住んでいたことが確認されている。³³（カ）の詩題に「二十世紀之春、偕夫子住鎌倉（二十世紀の春、夫子と偕に鎌倉に住む）」とあり、一九〇一年初頭にも、鎌倉に住んでいたことがわかる。錢恂は、一九〇一年一月三日、本国の上司張之洞から帰国命令を受けた。しかし、錢恂はこれを拒むかのように、同月九日、病気を理由に監督官を辞職した。鎌倉に長く住むことになった理由の一つは、この辞職があつたのかもしれない。ちなみに、『近衛篤磨日記』所載の錢恂書簡には、住所を「鎌倉坂ノ下町七番地」と記す。³⁴

明治、大正期の鎌倉は、皇族や華族、政府高官の別荘が存在する海浜別荘地として著名であつた。冬も温暖であることから、一八九九年には、明治天皇の皇女（富美宮、泰宮）の避寒地として、鎌倉御用邸が設けられた。このほか、山階宮家、島津、松方、前田家³⁵などの別邸もあつた。従つて、錢恂と単士釐は、鎌倉を舞台にさまざまな人々と交流していた可能性が想定される。

このように旅先の作品が多い理由は、単士釐が詩を書き留めた意図にあるだろう。そもそも『受茲室詩稿』は、広く公開するためではなく、単士釐自身が回想したり、ごく親しい人々に示すための記録であつたらう。それゆえ、日常の暮らしではなく、非日常の出来事が残されたと考えられる。

四 詩の特色について

次に、単士釐の詩の特色について考えてみたい。五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）を用いた情景描写の巧みさと押韻技量の高さが彼女の特色だろう。以下、具体的に事例をあげて確認してみよう。

まず、視覚について、(ア)を見てみよう。一九〇〇年五月、再来日の際、神戸に寄港した際の作品である。一行は、沖合に停泊中の船から舳に乗って神戸の町に上陸し、高台の料亭で酒宴を開いた。第二十七、二十八句は、料亭から眺めた海の描写である。

俯観海面浴落日　　俯きて観る　海面は落日を浴び、

金波万点光射眸　　金波万点にして光は眸を射る。

建物から海を眺め下ろすと、海面にさざ波がゆらめき、夕陽を受けきらきらと輝いている。春の夕暮れの内海の様子を光や色の表現を織り込んで見事に描いている。海面や海辺の描写は豊富で、たとえば、「海闊浪浮天」(カ)は波立つ広大な海面を、「澄波似鏡平」(キ)は波ひとつない穏やかな海を、「波光花影搖窓牖」(ケ)は波の光を受けた桜の花影が障子にうつるさまを描く。色彩表現としては、「山翠」(オ・其二)、「白蘋与紅蓼」(コ・平瀉落雁)などがある。

旅の景色の描写にも個性がみえる。(オ)第四首の冒頭では、箱根鉄道から見た重なり合う山々を「山囲如筐復如筐(山の囲むこと筐の如く復た筐の如し)」と竹かこの箱に見立てて詠んだ。単士釐の詩には、このような見立て表現が多い。(キ)では、鎌倉から金沢方面へ山越えする道を次のように表現した(第十五〜十八句)。

聊躡過山洞 有如蛇赴壑

聊か躡き山洞を過ぎ、蛇の壑に赴くが如き有り。

豁然更開朗 天地何寥廓

豁然として更に開朗にして、天地何ぞ寥廓たる。

鎌倉駅から金沢へ向かう道筋に朝比奈切通しがある。細い道の両側には切り立つ崖が聳え、またトンネルのような場所もあるようだ。洞穴もあり、うねうねと蛇が這うような道だと表現している。さらに進むと、一気に視界が開け、東京湾が一望できる場所に出た。第十七句は、陶淵明「桃花源記」に倣い、洞穴をぬけて一気に視界が開けるといふ情景を表現した。次いで、北条氏の青ヶ台城跡、金沢文庫を巡って、展望台（一覽亭）から金沢八景を眺めた。このうち、野島が水辺に屹立する姿を、故郷の小姑山になぞらえている。小姑山は、安徽省安慶市宿松県の長江河畔にそびえる岩山である。単士釐は、日本の風景を経験値の中に置き換えつつ、一幅の絵のように鮮やかに描写した。情景の描写は、単士釐の詩における最大の特徴と言えるだろう。

触覚、味覚の表現もいくらかある。例えば、(イ)では、温泉旅館の様子を次のように描く。

傑閣出層雲 登臨去俗氛

傑閣 層雲より出で、登臨すれば俗氛を去る。

泉温堪却疾 酒冽不辭醺

泉温 疾を却くに堪へ、酒冽く醺ふを辞さず。

中国の温泉は、楊貴妃の愛した華清池が知られているが、単士釐の郷里付近にはない。従って、単士釐は、来日して初めて温泉を体験したと思われる。塔之沢温泉は、無臭のアルカリ性単純温泉であるから、抵抗も少なかったであろう。眺めのよい温泉宿から景色を楽しみ、心も晴れやかになり、温泉の効能も体感した様子が窺える。風呂上がりに、選りすぐりの清酒が供されたのかもしれない。温泉、日本酒といった未知の体験を楽しみ、ゆったりと

くつろぐ夫妻の姿が描かれている。

(ク)は、迎春の宴で「屠蘇酒」と「恵比寿」麦酒が供されている。恵比寿ビールは、一八九〇年より製造が始まり、一九〇〇年パリの万国博覧会で金賞を受賞したという。銭恂は、欧州に赴任した経験があり、ビールも好んだと思われる。さらに、日本食について、「海錯山蔬咸適口(海錯山蔬は咸な口に適ふ)」と、おおむね美味しいと述べたあと、第二十九、三十句では海鮮の生食に挑戦した様子を述べている。湘南地方は、現在も伊勢エビやまぐりが特産品である。

大蝦巨貝勞擊剖

大蝦 巨貝 勞して擊剖し、

啖腥不甘旧習狂

腥を啖ふこと甘んじざるは旧習の狂ひなり。

大きなエビや大きな貝を手づから開いてみたものの、生で食べる習慣にはどうしても馴染めない、と吐露して、苦手なものもあったことをユーモラスに描いた。味覚や触覚表現では、初体験に挑戦したことがらを中心に、その感想を率直に描いたものが多い。

他方、嗅覚の描写は少なく、(ア)に「花香人影相夷猶(花香人影相ひ夷猶す)」とある程度である。

最後に、聴覚表現を検討する。先述(イ)第三聯に「山迴朝猶暗、溪喧語莫分(山迴かに朝猶ほ暗く、溪喧しく語分かつ莫し)」とある。宿泊した建物は、臨溪閣の名のとおり溪流のすぐそばであったのだろう。ほの暗い朝早く目覚めると、話し声さえかき消されるほどの川音であった。早朝の静謐な温泉宿に溪流の川音だけが響くさまを鮮やかに表現した。

また初来日した一八九九年の(エ)でも音が効果的に詠まれている。

天籟純然出自由 清音嘹唳發童謳 天籟は純然として自由に出で、清音は嘹唳として童謳を發す。

中華孩稚生何厄 埋首芸窓學楚囚 中華の孩稚は生まれて何の厄かあらん、首を芸窓に埋め楚囚を學ぶ。

詩題の「汽車」は、現代中国語では自動車を指すが、ここは日本語の蒸気機関車の意で用いられている。

どこかへ汽車で移動していると、子ども達の清らかな歌声が響いてきた。「嘹唳」は、鳥の澄んだ鳴き声を表現する双声語で、ソプラノの愛らしい声を印象づけている。日本では、小学校の音楽教育が進展し、明治十年代頃から、西洋音楽に日本語の歌詞をつけた「蝶々（ドイツ童謡）」、「見わたせば（ルソー作曲）」¹⁾などの唱歌が生まれた。一八九六年刊『新編教育唱歌集 第二』には「汽車の旅」という歌も収められている。

蕭氏はこの詩意について、受験勉強に没頭し活力を喪失した中国の子供の不運を嘆く²⁾と分析された。確かに外交官夫人として、中国と日本を対比する面もあったであろう。それにも増して、一人の母としての心情が、強く籠められていたのではないだろうか。故郷に子ども達を残し、単身で海を渡って見ず知らずの異国へ渡ってきた。不安と淋しさでいっぱいだったに違いない。そのとき、ふと車中で子ども達の歌声が耳に響いてきた。無邪気な歌声は母性を呼び覚ました。我が子は、今も、両親のいない家の書齋で、机に向かって黙々と勉強しているだろう。故国に思いを馳せ、胸がしめつけられるような切なさが押し寄せてきたのではないだろうか。単士釐にとって、汽車で耳にした子ども達の歌声は、母としての溢れる愛情を呼び覚ます音だった、と読み解きたい。

また、押韻についても強い意識が見て取れる。今回対象とした作品は、すべて一韻到底である。このうち、(カ)、(ク)、(ケ)は和韻詩である。(カ)は、蘇軾の詩により、他の二首は錢恂の詩に和したものである。(ク)と(ケ)の韻字は、すべて錢恂と同一字を用いている。しかも、蚪、喉、羨、擲、濶、塿など、用例の少ない字も散見される。このほか、(コ)を見ると、結句の韻字は、すべて風景題の末尾と同一の字を用いている。このように、単士釐

は、詩の韻字に対し、相当の知識と技量、こだわりを持っていたのである。

以上、五感を用いた描写について、その特徴を検討した。特に視覚的表現が多く、アルバムか絵はがきのようにいきいきと表現している。⁽⁴⁴⁾ いつの日か回想するため、あるいは故国の親族や友人に伝えるために、身近な物や自国の風景になぞらえて描写したと思われる。他方、味覚や触覚の表現からは、旺盛な好奇心で新取の体験を楽しむ彼女の性格が垣間見える。

五 詩から見える人間関係

検討対象作品のうち、(キ)と(ケ)の二首の詩題には人名が記されている。これらの人々は、基本的に夫錢恂の知人友人である。どのような人物で、どのように知己を得たのだろうか。

(キ)詩は、金沢、横須賀への日帰り旅行を詠んだ作である。⁽⁴⁵⁾ 旅の案内人は、詩題の「津田老」こと、津田梅子（一八六四～一九二九）の父、津田仙（一八三七～一九〇八）である。仙は佐倉藩士の家に生まれ、幕府通訳として福沢諭吉らとともにアメリカに赴いた経験をもつ。学農社農学校を設立するなどして、農業の近代化に貢献した人物である。活動は多岐にわたり、中村正直（一八三二～一九一）、岸田吟香（一八三三～一九〇五）らとともに視覚障害者の学校（楽善会訓盲院）を開いたほか、青山学院のさきがけとなる女子小学校の創設にも協力した。⁽⁴⁶⁾ また、キリスト教の熱心な信者としても知られる。当時は、第一線を退き鎌倉に隠居していた。⁽⁴⁷⁾ 同行者の梅子は、同年七月に華族女学校、女子高等師範学校を辞職し、九月十四日に女子英学塾を開校したばかりであった。冒頭四聯で日帰り旅行の経緯と津田父娘を紹介した。

老翁真隱者 特訂游山約

老翁は真の隱者なり、特に山に遊ぶの約を訂ぶ。

金沢横須賀 風景殊不悪

金沢横須賀、風景殊に悪からず。

愿言与子偕 出郊踐宿諾

愿みて言ふ 子と偕に、郊に出で宿諾を踐はんと。

同行有女士 学校秉師鐸（津田梅子） 同行の女士有り、学校の師鐸を秉る（津田梅子なり）。

ここから、津田仙が、非常に丁寧に誘った様子が見て取れる。第六句の「宿諾」は、前々からの承諾して未実行のことを指す。⁴⁸津田仙と錢恂とは、かねてより交流があつたのあろう。先述のとおり、一九〇〇年初春、錢恂夫妻は鎌倉に住んでおり、この頃に知己を得ていた可能性がある。学農社卒業生の麻生幸二郎は「恩師津田仙先生が支那人と交わりが深かつた」とも回想している。⁴⁹

ここで、錢恂と津田仙を仲介した可能性のある人物の一人として、岸田吟香を挙げてみたい。岸田吟香は、ヘボンの『和英語林集成』編集協力者、『東京日日新聞』主筆、目録「精錡水」の製造販売のほか、東亜同文会の設立に関わるなど中国との交流に尽力した人物として著名である。津田仙と岸田吟香との協業には、先述の樂善会設立、『精密正確兵要清韓新地図』（学農社、一八九四年）の共同製作などがあり、長期間親しくしていたと思われる。一方、岸田吟香と錢恂との間にも関係がある。一九〇〇年五月、錢恂の上司であつた張之洞の子息を新橋駅まで出迎えたメンバーの一人が岸田吟香であつた。⁵⁰また、一九〇一年には、錢恂と岸田吟香が連れ立って、近衛篤磨と会食した記録もある。これらことから、錢恂と岸田吟香の二人も、親しい関係であつたと思われる。このように、それぞれと親しかつた岸田吟香が、鎌倉住まいの二人を引き合わせたのかもしれない。

旅を通して、単士釐が津田梅子と親交を深めた様子も窺える。第八十一〜八十四句では今後の抱負を述べている。

寄語深閨侶 療俗急需薬

深閨の侶に寄語すに、俗を療すに急ぎて薬を求めんと。

幼学当斯紀

学まなぶに勉つとむるは当に斯の紀なるべくして、

(英人論十九世紀為婦女世界、今已二十世紀、吾華婦女可不勉旃)

(英人論するに十九世紀は婦女の世界為りと、今已に二十世紀、吾が華の婦女こゝれ施を勉めざる可けんや)

良時再来莫

良時再来するや莫なきや。

第八十三句注のイギリス人の論は、ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill、一八〇六―七三) の『女性の解放』⁵¹を指すと思われる。単士釐は、中国の女性達もこれからは学問に励むことが急務だと強い言葉で述べている。津田梅子と志を語り合い、意気投合したことを想起させるとともに、彼女達の熱い思いが伝わってくる。

もう一人、(ケ)の詩題に見える「夏地山」であるが、夏偕復(一八七四生)、浙江杭県(現在の浙江省杭州市)の人である。一八九九年九月に工部主事から留学生総監督に任じられ、錢恂とともに来日したようである。⁵²その後一九〇二年十二月下旬までの間に複数回の日中間の往来記録がある。⁵³錢恂にとっては、留学生を監督するため、苦楽を共にした間柄であった。

さらに、本文注には同伴者の夫人と娘の情報がある。「夏夫人は九歳になったばかりの娘の循蘭を連れて来た。彼女は、日本華族女学校に在籍しているが、今は休暇中なので、「両親と一緒に来た」⁵⁴との説明がある。娘の夏循蘭の名は、錢稲孫兄弟、包豊保とともに「浙江同郷留学東京題名」に記載があり、一八九九年六月に来日し、就学先を華族女学校と記す。⁵⁵

このとき、錢恂、単士釐夫妻にとって、江ノ島は二度目の訪問であった。宴席の開かれた金亀楼は、かつて江ノ島の江島神社中津宮中津宮広場にあった旅館で、眺望に恵まれ人気があったという。⁵⁶第十三句に「桜狩及時猶未後

（桜狩り時に及びで猶未だ後れざるがごとし）」とあることから、花見の季節であったことがわかる。穏やかな春風の季節、循蘭嬢も春休みと知って、錢恂がお気に入りの場所に入り一家を誘い、花見の宴を設けたのであろう。夏借復一家と、家族ぐるみの親しいつきあいであった様子が窺われる。

このほか、(ク)に付す錢恂詩の自注にも注目したい。末句のあとに「是日挈全家約東友游江島、飲於金亀楼也（是の日全家を挈とらひ東友と約し江の島に遊び、金亀楼にて飲めるなり）」と記す。ここから、錢恂一家は、「東友」（日本人の友人）と約束して江ノ島を観光し、金亀楼で酒宴を設ける間柄になっていたことがわかる。初来日から約二年、錢恂には「友」と称しうる日本人がいた。同席した人物としては、留学生監督として知己を得た者や、先に示した津田仙や岸田吟香、鎌倉に別邸を持つ人物、『近衛篤磨日記』に記録される通訳などが想定される。こうして、錢恂夫人、単士釐の交際関係も、同様に広がっていったと推測される。

最後に、(ク)より、新たに加わった錢恂の第二夫人について触れておきたい。錢恂が、人助けとして未亡人を娶ったと詠んだのに対し、単士釐は「扶持尤喜得新婦（扶持し最も喜ばしきは新婦を得たることなり）」（第五十句）と返した。当時の中国の社会通念において、正妻のほかに夫人がいることは、一種のステータスとされていた。単士釐にも、これに準ずる感情があったのであろうか。ちなみに日本では、一八九八年に重婚が禁止されたばかりであった。³⁸⁾

第二夫人については『癸卯旅行記』にも記録があり、その名を「朝日婢」と記す。「朝日」を訓読みすると「あさひ」であり、日本人であると推測される。旅行記では、上海到着後、単士釐が夫と分かれて硤石鎮に帰省した際、朝日が同行している。³⁹⁾ よって、朝日は単士釐の侍女を兼ねていたとも考えられる。このあと、朝日は、ロシア出張の最後まで夫妻に随行する。一九〇五年十二月、弟の錢玄同が日本へ留学するため上海から渡航したときには、朝日も同乗したとの記録がある。⁴⁰⁾

このように、錢恂夫妻の周囲には、外交官としての仕事仲間一家や、仕事を通じて知己を得た日本人、鎌倉で交際した日本人父娘、新たな家族となった日本人女性などがいた。日本人とはいずれも良好な関係を結んでおり、このことが単士釐の日本観にも反映されたと推測される。

六 心情の変化と日本語の習得

これまでの検討により、単士釐が夫とともに観光地を訪れ、そのときどきを楽しんでいた様子が確認できた。あらためて、その心境の変化を整理してみたい。

先掲の詩（イ）、（エ）より、初来日の期間（一八九九―一九〇〇年春）の心情を確認すると、最も早い（エ）では、旧態依然のままの中国の教育に対する疑念と、故国に残してきた子ども達への追慕がみられた。

しかし、翌年春の帰国直前になると、前向きな変化が現れる。初めて電気鉄道に乗り、宿泊先では温泉でくつろぎ、日本酒も楽しんだ。しかも、先述のとおり、日本語を学んでみたいとの前向きな姿勢も現れ始めていた。翌五月、再び日本へ来た際の（ア）冒頭四聯では、いつそう明るい心情が述べられる。

去歳来神州

船窓遙見山中楼

去歳神州に来たるも、船窓 遙かに山中の楼を見る。

（中略）

恰合風利不当泊 欲往未能心煩擾

恰合 風利泊に当らず、往かんと欲するも未だ能はず心煩擾せり。

今茲夫婿偕重游 東方千騎居上頭

今茲に夫婿偕に重游し、東方千騎 上頭に居る。

冒頭で昨年の様子を回想する。あいにく風向きが悪いために寄港できず、物憂く船の中から神戸を眺めるしかなかったという。単身のうえ、悪天候であったことが、心細さを増幅した様子が見て取れる。しかし、今回は、夫と一緒にのだ。⁽⁶¹⁾第八句は、漢代の相聞歌「陌上桑」⁽⁶²⁾が出典で、一行の責任者である夫を誇らしく頼りに思う心境が伝わってくる。しかも、この時は息子達も同行している。家族と一緒にいることは、彼女を明るい気持ちにしただろう。冒頭に初来日の様子をあげて対比することで、明るさをさらに増幅させている。

一行は、停泊船から神戸の町に上陸し、料亭で酒宴を開いた。かの夏目漱石も同じ年、留学に向かう際に神戸で下船して休息したという。⁽⁶⁴⁾進行方向は逆であるが、錢恂一行も同様であったとみられる。

双環迎門殷笑語

双環門に迎して殷おほひに笑ひ語るも、

愧予未解難為酬

愧づらくは予は未だ解さずして酬を為し難し。

料亭に入ると、女中が笑顔で迎えてくれた(第十九句)。先行研究も指摘するように、第二十句で、日本語が出来ないので、返答できないと悔やんでおり、改めて日本語を習得したいとの思いが感じられる。

最後二聯では、留学生を率いる夫妻の覚悟が詠まれている。

諸生負笈遠登涉

諸生は笈を負ひ遠く登渉し、

不辭跨海師承求

海を跨ぎ師承の求をも辞さず。

要使蓁莪械樸供廊廟

蓁莪をして械樸を廊廟に供さ使むるを要するに、

豈徒煙霞景物奚囊収

豈に徒らに煙霞の景物は奚囊の収とならんや。

留学生達は、最新の学問を修めるためにはるばる海を越えて日本へ渡った。国政に役立つ人材となることを求められているのであって、風光明媚な地を繞って詩を詠むだけに終わってはならない、と強い覚悟を述べている。⁶⁵

一八九四〜九五年の日清戦争での敗北以降、中国では日本への関心が高まった。一八九八年、錢恂の上司・張之洞は中国版『学問ノススメ』とも言うべき『勸学篇』を著した。錢恂は張之洞の命を受け、留学生を引率して来日しており、大きな責任を負っていた。一方、単士釐は、息子達の留学の成果をあげるべく、詩作を楽しむだけで終わらないようにしよう、との自戒の気持ちを籠めたのであろう。

一九〇〇年秋の作品(キ)九・十句目に、日本語の会話を試した様子が綴られている。

東語雜華語 居然通酬酢 東語華語を雜ふれば、居然として酬酢を通ず。

日本語に中国語をまじえて話してみたところ、思いのほか言葉が通じた、と大喜びしている。このことから、単士釐は、このころ、日本語を学び始めたばかりであったと思われる。なお、本句の直前に津田梅子が登場する。話し相手は、津田梅子であったのかもしれない。⁶⁶

一九〇〇年秋以降、単士釐は鎌倉や江ノ島を遊覧して楽しんだ。夫の周囲には、日中の親善を望む人々が集うようになっていた。単士釐も、徐々に日本の生活に慣れ、日本語書籍の翻訳に挑戦することになる。

七 単士釐の日本語教師について

来日したとき、単士釐は既に四十歳を過ぎていた。語学の才能を持っていたとしても、日本語を学ぶには並々な

らぬ努力が必要であり、教える側にも同様のことが求められたであろう。単士釐は一体誰からどのような形で、日本語を教わったのだろうか。管見の限り、これまでこの問題についての考証は見当たらない。以下、『受茲室詩稿』及び『癸卯旅行記』をもとに、一仮説を提示してみたい。

はじめに、単士釐の日本語能力を確認しておこう。『癸卯旅行記』を見ると、一九〇三年四月に、上海を出て、一旦長崎に再入国した時、単士釐は税関と日本語で対応したほか、シベリア鉄道でたまたま同乗したイギリスの駐長崎領事とも日本語で会話している。⁽⁷⁷⁾ここから、日本語で応答できる(話す、聞く)能力があったこと、夫に代わって対応する気概を持っていたことが確認できる。

次に、単士釐が翻訳した書籍をみてみよう。『単騎遠征録』は、日本文を学ぶ一環で、初めて翻訳に挑戦した書である。ベルリンの日本公使館駐在武官であった福島安正陸軍少佐(一八五二〜一九一九)が、任務終了にあたり、一八九二年二月より四百五十日近くかけて、ベルリンからウラジオストクまで約一万四千キロを馬に乗り横断した記録で、『大阪朝日新聞』の連載(百二十回余)⁽⁷⁸⁾を書籍化したものである(付録も含めて四三二頁)。当時、福島安正の冒険は、偉業として喝采を浴びた。一例として、『癸卯旅行記』中にある単士釐の訳文と、その原文を示す(原文に従い片仮名のふりがなを付す。原文の平仮名ふりがなは省略した)。

伊爾庫次克瀨昂噶拉河右岸、人口大約四万七千、位西伯利之中心、亦第一都会地。觀光察勢、無如此地、故留馬十日、得巡覽哥薩克騎兵・予備歩兵大隊營・専門器械学校・陸軍病院・候補士官学校・小学校・博物館等。⁽⁷⁹⁾

(原文) 義爾克斯科は安牙爾河の右岸に瀕し人口大約四万七千、悉比利之中心に位し亦第一都会の地にして光を觀勢を察する此地に如くなし故に中佐馬を此地に留むる者十日、可薩克騎兵予備歩兵大隊營、専門器械学校、陸軍病院、候補士官学校、小学校博物館等を巡覽しけり。⁽⁸⁰⁾

原文は、漢文訓読的な文語文で、読点がない。一文を区切るだけでも初心者には難しかったと思われる。また、地名や人名が頻出するが、中国の音訳に置き換える工夫も見られる。他の翻訳書の底本も、いわゆる文語文で書かれている。このほかの翻訳書の仮名づかいは、永江正直『女子教育論』（本文一七二頁）が、漢字と片仮名による表記で、句読点はない。また、下田歌子『家政学』（本文、上Ⅱ一六二頁、下Ⅱ二五四頁）⁷¹は、一部の外来語を除き、漢字と平仮名の文で、句読点を付す。

出版された二書とも完訳ではないが、かなりの労力を費やしたことは間違いない。ある程度以上の学識を持つ日本人の援助や指導が必要であったと思われる。『家政学』の翻訳は、一九〇二年九月に刊行されたことが確認できる。単士釐は、日本語を学び始めてわずか一年ほどで、書籍を翻訳できる程度の能力を得ていたのである。⁷²しかも、これらの翻訳は、すべてロシア渡航前の一九〇二年までのものであり、その業績は、目を見張るものがある。

次に、三書の選択基準を考えてみたい。『単騎遠征録』と『家政学』は、単士釐及び協力者の意思で選択したと思われる。『単騎遠征録』は翻訳練習の書であり、『家政学』は単独の刊行であるから選択に制約はないだろう。これに対し、『女子教育論』は、教育世界出版所の教育叢書全八十二冊の中の一冊である。従って、出版社や編集者の意思も反映されていると推測される。

これらの状況から、単士釐の日本語教師は、日本人の知識人女性であったと推測する。当時の中国人女性の慣習、加えて外交官夫人という立場を考慮すると、教師が男性である可能性はかなり低い。しかも、日常会話だけではなく、翻訳にも挑戦しており、学識をもつ日本人が支援したと思われる。立場上、気軽に単身で外出できなかった可能性が高く、個人指導の形式だった可能性もある。

では、教師はいったい誰だったのだろうか。単士釐の著述に名前が見える日本人女性を対象に考えてみよう。

まず、『受菴室詩稿』をみると、巻上の津田梅子のほか、巻中に池田信子、下田歌子の名がある。このうち、津田

梅子と下田歌子は、学校経営者として多忙であり、物理的な時間の面から、日本語教師とはなり得ない。ただし、下田歌子には、一九〇〇年頃、実践女学校関係者とともに中国語の勉強会を開いた記録がある。⁽⁷⁵⁾

池田信子は、詩題「寄日本池田信子(三首)」による。漢詩を贈った相手であり、漢詩を解する友人であったと思われる、教師にはなりえないだろう。⁽⁷⁶⁾

次に『癸卯旅行記』であるが、下田歌子、朝日婢のほか、登場順に小具貞子、時任竹子(たけ子)、河原操子、女友柳原氏の六名が確認できる。先述のとおり、朝日は単士釐の身近な存在であり、日常的に会話を交わしたと思われる。よって、少なくとも、日常会話の練習相手をつとめた可能性は非常に高い。

小具貞子と時任たけ子は、東京在住で、ともに長男の妻、包豊保の教師である。

単士釐は「愛住女学校校長」小具貞子の自宅で茶のもてなしを受けたという。⁽⁷⁷⁾小具貞子(一八六一―一九二六)は白河藩士の娘で、女子師範学校を卒業した翌一八八〇年に愛住女学校を創設した。小具貞子も錢恂と同じく近衛篤磨と面識があった。『近衛篤磨日記』によれば、一九〇〇年一―六月、浄土真宗大谷派からの派遣で中国、韓国を視察しており、妹の武子は中国語が出来たとの記録も見える。

小具貞子と錢家の関係を示すのが、年譜に示した『東京朝日新聞』一九〇一年九月十九日の記事である。「錢恂氏は……今茲十八になる娘をば四谷愛住女学校主小具貞子に託して寄宿勉強せしむることにし貞子は身に引受けて熱心に教育する由」とある。しかし、娘の名は明記されていない。

今般、この娘が、包豊保であったことを示す資料を見出した。同年十二月発行の雑誌『裏錦』⁽⁷⁸⁾雑報欄「清国女子留学中錢豊保嬢」である。錢姓であるのは、日本の慣習に従ったものと思われる。以下に全文を示す。

張之洞幕下錢恂氏の二女豊保嬢(十八)は、目下四ッ谷愛住女学校にあるが、嬢は賢明な母君の手に教育せら

れ四書五経はおろか詩文をも学び、性質は誠に温良で愛嬌あり、しかも異国に來りてよく動ぜず臆せざるは、さすが大國人の風ありと。嬢は多く日本服で海老茶袴をはき、日本語も余程たくにみなり、孜々勉強し居ると云ふ。

『東京朝日新聞』記事と比較すると、年齢も一致する。また、包豊保は、母から四書五経や詩文の教育を受けたと記す。この母こそ、単士釐であろう。包豊保の日本語が上達している様子も窺える。包豊保は、愛住女学校で日本語能力と基礎的学力を身につけたのち、実践女学校に入学したと推測される。

一方、時任たけ子を『癸卯旅行記』では「東京校中女幹事」と記す。『下田歌子先生伝』によれば「実践女学校の寄宿舎の舎監」である。一九〇三年時点で包豊保は実践女学校に在籍中であり、彼女の関係者と判断できる。

柳原氏は、『癸卯旅行記』に「女友」とあり、やはり日本語教師ではないだろう。

最後の河原操子（一八七五—一九四五）は、ただ一人、中国人女性に日本語を教えた人物で、単士釐の日本語教師であった可能性がある。

河原操子は、長野県松本市で生まれた。父の河原忠は、もと藩儒で、シベリアを横断した福島安正を竹馬の友とする。操子は幼少期より父から日中友好の必要性を説かれて育った。東京高等女子師範学校に進学するも、体調を崩して帰郷し、長野県立高等女学校の教員となった。

一九〇〇年夏、河原操子は講演で長野を訪れた下田歌子を訪ねて、中国で教育事業を興す夢を伝えた。面会から間もない同年九月、下田歌子が彼女を大同学校校長の犬養毅に推薦したことにより、新設された同校女子部に着任した。回想談によると、昼間は同校で中国人女性に日本語や編み物を教え、空き時間に教頭の鐘氏より北京官話を学んだ。また、紅蘭女学校の寄宿舎に住み、フランス語を学んだという。

一九〇二年八月末、河原操子は再び下田歌子の要請を受け、上海に新設される務本女学堂に向け横浜港を出発した。単士釐は、同年、上海の務本女学堂に校長夫人と河原操子とを訪ねた。錢恂は、この年の夏から十一月半ばまで上海に滞在している。よって、単士釐もこの間に河原操子訪問したと思われる。その後、河原操子は一九〇三年末から〇六年一月まで、モンゴルのカラチン王府に滞在し、王妃とともに毓成女学堂を創設して教育に従事した。帰国後は、一宮鈴太郎と結婚してニューヨークへ渡った。⁷⁹⁾

ここで、錢恂と大同学校の関係及び河原操子の同校着任時期に注目したい。錢恂は、当時同校の留学生監督をつとめており、女子部の創設に関与した可能性が高い。河原操子が同校女子部に着任した時期と、単士釐が日本語を学び始めた時期とも、ほぼ一致している。

また、教材選びにも関係性が窺える。最初の教材『単騎遠征録』は、河原操子にとって非常に近い人物の体験記である。さらに、『家政学』の著者の下田歌子は、包豊保の師であると同時に、河原操子の大恩人でもある。

加えて、河原操子は、翻訳の協力者に求められる能力（日本語教授、学識等）を十分備えていた。しかも、河原操子が日本を離れたあと、単士釐に翻訳活動の形跡は見当たらない。

このほか、河原操子の回想談にも単士釐を彷彿とさせる発言がある。大同学校在任中の様子を回想して、「在留支那人の家庭を見ましても、支那の婦人は、形式上男尊女卑にも拘らず、実際は非常な勢力を持つてゐました⁸⁰⁾」と述べた。これは、中国人の特定の一家庭を複数回訪問した感想であろう。他方、中国人教育や対日感情に腐心していたとも述べており、軽々に大同学校の一生徒の家庭を訪問したとは考えづらい。彼女は、同校関係者宅⁸¹⁾鎌倉の錢恂別邸を訪れたことがあったのではないだろうか。すでに横浜―鎌倉間は、横須賀線が開業しており、所要時間はわずか四十五分ほどであった。先述のとおり、一九〇一年夏から〇一年末までの間、錢恂、単士釐夫妻は、鎌倉で生活した時間が長かった。河原操子が見た、家庭内で強い力を持つ女性像は、積極的な単士釐の姿と近似しているよ

うにも思われる。

これらの諸事実は、河原操子と単士釐との間に何らかの関係があったことを窺わせる⁽⁸¹⁾。ただし、河原操子はこの点について、生前何も語っていない。河原操子の回想『蒙古土産』は、出版にあたり、下田歌子の意向によって機密情報等が大幅に削除されている。その際に、単士釐や包豊保関連の記述も割愛された可能性もある⁽⁸²⁾。『下田歌子先生伝』も、中国人初の女子留学生Ⅱ包豊保の名を記さない⁽⁸³⁾。

あくまでも仮説の域を出ないが、河原操子が、単士釐の日本語教師としての条件をよく充たしていることだけは確かである。

おわりに

以上、来日初期の単士釐について、『受茲室詩稿』所収作品をてがかりに、詩歌の特色と心境の変化、日本語習得過程について検討した。

対象作品中、時期未詳の四題のうち三題について、おおよその創作時期を定めることができた。また、そこで詠まれていた内容は、おおむね夫錢恂とともに訪れた関東の風光明媚な風景であった。これまでに見聞したもののや景色、あるいは基礎的な典故を用いて、色や光を織り込んで見事に描写した。また、押韻にも強い意識が感じられた。しかし、これらの詩歌は、公開することを想定して創作されたものではない。思い出として、あるいは故国の親族友人に示すために詠まれたものと思われる。これも、情景描写が多い一因であろう。また、日本の風物を好み、初めて体験する電気鉄道、温泉や日本料理も積極的に楽しんだ様子が綴られている。新しいものに対して臆することなく挑戦する意欲的な性格が窺える。他方、母として妻としての心情も底流にこめられていた。

また、単士釐の交際関係もみえる。この時期の単士釐は、夫の錢恂に随って外出し、夫の知人友人と接触していた。その中には、津田仙のように、清国に対し好感を持ち、社会的責任を負う立場の人物がいた。周囲の女性も、社会的地位がある人物、もしくははその親族が大半である。訪問先や滞在地も、知人友人、または仕事関係者が、錢恂をもてなすために用意したと推測される。現代の表現を借りればハイクラスの旅館や料亭が多い。このように恵まれた環境に身を置いたことから、単士釐は日本や日本人に対し、好感を抱くようになったと思われる。

さらに、単士釐は、来日からわずか三年ほどの間に、日本語会話の習得のみならず、日本書の翻訳にまで挑戦している点に注目し、これまで未解明の日本語教師について検討し、横浜の大同学校女子部の教師であった河原操子であろう、との仮説を提示した。

単士釐と日本人女性との交際について、本稿では、日本語教師としての妥当性に絞って検討した。彼女達がどのような人物で、単士釐といつ頃知り合い、どのような関係にあったのかなど、なお未解明の事項が多い。今後の課題としたい。

注

(1) 単士釐『癸卯旅行記』(上海国学社、一九〇四年)。日本を出発し、朝鮮、中国を経由して、シベリア鉄道に乗り、ロシアの首都サンクトペテルブルクに到着するまでの約二ヶ月半をつぶさに記した。

(2) 谷川栄子氏の論文は「近代中国人女性の見た日本・朝鮮・ロシア・中国——錢単士厘『癸卯旅行記』を通して」(『国際関係研究』第二十二卷三号、日本大学国際関係学部国際関係研究所、二〇〇一年十二月、一一九～一三九頁)、『癸卯旅行記』に見られる錢単士厘の女性観」(『国際関係研究』第二十二卷四号、日本大学国際関係学部国際関係研究所、二〇〇二年二月、二七一～二九〇頁)、「東西二つの国門の間を行く——錢単士厘『癸卯旅行記』の辿った道」(『中国ノンフィクション』第九号、中国報告文学研究会、二〇〇二年二月、一～九頁)の三篇。蕭燕婉氏の論文に「単士釐と日本——『受茲室詩稿』と『癸卯旅行記』をめぐって」(『九州中国学会報』第四十五卷、九州中国学会、二〇〇七年、九二～

- 一〇六頁)、「単士釐とロシア——一九〇四年の『癸卯旅行記』を中心に」(『中国文学論集』、九州大学中国文学会、第四十号、二〇一一年、一九〇—二三頁)の二篇がある。
- (3) 錢単士釐撰・鈴木智夫訳註『癸卯旅行記註——錢稻孫の母の見た世界——』汲古選書五四(汲古書院、二〇一〇年)
- (4) 邱巍氏の研究は『吳興錢家——近代學術文化家族的断裂与傳承』(浙江望族家族史研究系列叢書、浙江大学出版社、二〇〇九年)の「第四章 単士釐——閩秀伝統与近代知識人女性」(一一二—一四九頁)である。劉又瑄氏の研究は『一位近代女性啓蒙者的身影——単士釐(一八五八—一九四五)作品研究』(花木蘭文化出版社、二〇一一年)として出版された。
- (5) 蕭氏、鈴木智夫氏は字蕊珠、室名を受茲とされる。
- (6) 西村時彦(天囚)編、福島安正校閲『單騎遠征録』(金川書店、一八九四年)。
- (7) 下田歌子『家政学』(博文館、一八九三年)。単士釐の翻訳(二卷)は、上海の広智書局より一九〇二年に刊行された。
- (8) 永江正直『女子教育』(博文堂、一八九二年)。単士釐の翻訳は、教育世界出版社の教育叢書全八十二冊に収められている。
- (9) 卷一は『浙江図書館報』第一卷(一九二七年十二月)、卷二—五は『浙江図書館報』第二卷(一九二八年八月)に掲載された。京都大学人文科学研究所に手稿本四冊がある。胡適は、従弟単不庵から依頼され「三百年中的女作家——清閨秀藝文略序」(一九二八年四月二十三日記)を執筆した(『胡適文存 三集』卷八、亜東図書館、一九三〇年、一〇六七—一〇七九頁)。胡適は本書をつぶさに読み、単士釐の業績を高く評価している。ほかに類似の書として単士釐『清閨秀正始再続集初編』四卷がある。
- (10) 単士釐『受茲室詩稿』三卷(陳鴻祥校点、湖南文藝出版社、一九八六年)。本稿はこの『受茲室詩稿』を底本とする。
- (11) 拙稿「錢稻孫の私設日本語図書『泉寿東文書庫』」(『中国文学論集』第四十六号、九州大学中国文学会、二〇一七年、一五二—一六九頁)参照。
- (12) このほか上海の復旦大学図書館にも二種の稿本がある。黄湘金「簡論単士釐詩集版本——付『受茲室詩稿』校記」(『圖書館雜誌』二〇〇六年第二期、七二—七四頁)、李軍「補論単士釐詩集版本」(『圖書館雜誌』二〇一〇年第十一期、七五—七六、四七頁)参照。
- (13) 詩題(所載頁)「庚子四月十八日舟泊神戸」(二二頁)から「題金澤八景(八首)」(三三—三四頁)までとする。なお、「日本竹枝詞(十六首)」(三四—三六頁)については、創作時期未詳の作品が含まれることから、本稿では対象から除外

- した。
- (14) 『早稲田大学図書館紀要』(早稲田大学図書館、第六〇号、二〇一三年三月、一〇八―一九五頁)。
- (15) 近衛篤磨著、近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』五巻付別巻(鹿島研究所出版会、一九六八―六九年)。
- (16) アジア歴史資料センターは、外務省外交史料館及び防衛省防衛研究所資料を公開している(URL: <https://www.jacar.go.jp/>)、最終確認日=二〇二〇年十月二十二日)。
- (17) のち東亜同文会に拡大。
- (18) 『東京朝日新聞』一八九九年六月十八日三頁の「再昨十六日山城丸乗上等女客錢恂太守夫人東京聞此婦人能詩書」とある。
- (19) 『漢陽槍炮局ニ於テ本邦ヨリ銅ノ購入並ニ鎔銅技師雇聘ノ義ニ付在漢口領事ヨリ具申之件 明治三十二年』(JACAR「アジア歴史資料センター」Ref:B11091614000、鈹物関係雑件 第四巻[B3-571_004]「外務省外交史料館」) 参照。本文中に「張総督……本日錢恂氏ヲ当館ニ遣シ」とある(最終確認日=二〇二〇年十月二日)。
- (20) 『湖廣總督派遣の本邦留學生出發の状況通知』(JACAR「アジア歴史資料センター」Ref:C10062069600、明治三十二年自七月至十二月一号編冊「防衛省防衛研究所」参照。青木周蔵外務大臣から桂太郎陸軍大臣宛の通知文書該当は以下のとおり。「今般湖広総督張之洞ヨリ派遣ノ本邦留學生七十八名私費學生三名合計八十一名ノ内四十六名ハ汽船神戸丸便ニテ學生監督知府錢恂之ヲ率キ去ル二十一日上海出發ノ筈ニ確定又其残三十五名ハ來ル廿八日發ノ山城丸ニテ渡來ノ予定ニ有之」。なお、「東京朝日新聞」同年十一月五日一頁に「清国留學生の到着」の見出しがあり、「湖広総督張之洞部下の第二派遣留學生三十六名去る三日横浜着港翌四日上京せり」と記す。
- (21) 小林光太郎は外務省翻訳官。「清国皇帝陛下ヨリ前外務次官小村壽太郎外七名ハ勲章贈与之件 明治三十二年九月」に名が見える(JACAR「アジア歴史資料センター」Ref:B18010137100、外国勲章本邦人ハ贈与雑件ノ支那国部 第一巻(621219)「外務省外交史料館」参照(最終確認日=二〇二〇年十月二日))。
- (22) 中西正樹は一八八四年天津に官費留学、翌年北京に移った。一九〇六年奉天で刊行された漢字新聞『盛京時報』の主筆となった。[JACAR「アジア歴史資料センター」Ref:B1608081200、清国ハ本省留學生派遣雑件 第二巻(6-1-7-1_002)「外務省外交史料館」参照(最終確認日=二〇二〇年十月二日)]。
- (23) 萩村錦太(一八七〇年生まれ)は当時学習院教授。

- (24) 福沢研究センター編『慶応義塾入社帳』第四卷(慶応義塾、一九八六年)七二八頁、鄒双双『文化漢奸』と呼ばれた男——万葉集を訳した錢稻孫の生涯(東方書店、二〇一四年)巻末「錢稻孫略年譜」参照。なお、高木利久氏は一九〇〇年中とする。
- (25) 『癸卯旅行記』の「作者自叙」に「回憶歲在己亥(光緒二十五年)、外子駐日本、予率兩子繼往、是為予出疆之始。嗣是庚子、辛丑、壬寅間、無歲不行、或一航、或再航、往復既頻、寄居又久、視東國如鄉井(回憶するに、歲、在己亥(一八九九年)、外子日本に駐す。予、兩子を率ひて繼ぎ往けり。是れ予の疆を出づるの始めと為す。是れに嗣ぎて庚子、辛丑、壬寅の間、歲として行かざる無く、或ひは一航、或ひは再航す。往復既に頻にして、寄居も又た久しければ、東國を視ること郷井の如し)」とあり、複数回往復していたことが確認できる。
- (26) 『浙江潮』第二期(浙江同郷会、一九〇三年二月)。掲載誌の『浙江潮』は、東京で発行された中国語の雑誌で、一九〇三年中に十期まで発行されている。編集と執筆の主要メンバーは、蔣百里、厲綏之ら浙江省出身の留日学生と学者であった。その内容は政治、法律、経済、科技、歴史、時事、文学と広範に及び、当時の中国人留學生の動向を知る貴重な資料となっている。
- (27) 江戸時代より湯本、塔之沢、堂ヶ島、底倉、木賀、若之湯を総称して「箱根七湯」と呼んでいた。
- (28) 当時の建物は、残念ながら一九一〇年の洪水で流されてしまい、現在地に移転した。福住楼公式ウェブサイトを参照(URL: <https://www.fukuzumi-ro.com/index.html>)、最終確認日二〇二〇年十月六日。
- (29) 『詩経』小雅 甫田之什に「乃求千斯倉、乃求万斯箱(乃ち千斯の倉を求め、乃ち万斯の箱を求む)」とある。
- (30) 原題は「A guide book to Nikko」、横浜のジャパンメール新聞社より一八七五年に印刷された。
- (31) 一八九九年に「日英通商航海条約」が発効し、外国人の居留地の廃止と内地雑居が実施されると、さっそくサトウは中禅寺湖藩に別荘を建設した。井戸桂子「日光におけるアーネスト・サトウと武田久吉」(『駒沢女子大学研究紀要』第二十五号、駒沢女子「短期」大学二〇一八年、六三〜八〇頁)、十代田朗ほか「中禅寺湖畔における大使館別荘の立地と利用に関する一考察——英国公使アーネスト・サトウを中心として」(『観光研究』第十四卷第二号、日本観光研究学会、二〇〇二年、一〜六頁) ほか参照。
- (32) 『癸卯旅行記』三月六日(陽曆四月三日)に「辛丑寓居鎌倉……賞金沢牡丹則繞行湖壩(辛丑(一九〇二年)鎌倉に寓居し……金沢の牡丹を賞ずれば則ち湖壩を繞行す)」と記す(二六六頁)。

- (33) 「錢恂年譜」一九〇〇年五月十九日に『汪康年師友書札』を引用し「恂居牛込仲町廿二番地」と記す(二二六頁)。同じく一九〇〇年一月二十三日に引く『汪康年師友書札』には「弟近居鎌倉」と記す(二五〇頁)。
- (34) 『近衛篤磨日記』第四卷、明治三十四年九月八日参照(二七四頁)。
- (35) 前田侯爵別邸は現在、鎌倉文学館となっている。
- (36) (ア)は、神戸に寄港した様子を詠んだ作品である。詩題の日付「庚子四月十八日」を新暦になおすと、一九〇〇年五月十四日であり、先の年譜と合致する。
- (37) 「桃花源記」に「初極狭、纔通人。復行数十歩、豁然開朗(初め極めて狭く、纔かに人を通すのみ。復た行くこと数十歩、豁然として開朗なり)」とある。
- (38) 鎌倉幕府の執権であった北条貞顕が築いたとされる。
- (39) サッポロビール株式会社ウェブサイト「エビスの品質と歴史」(URL: <https://www.sapporobeer.jp/yebisu/history/>)参照。最終確認日＝二〇二〇年十月八日。
- (40) 「一家三代共飲於德國飯店、用稻俣孫輩帰來韻」(『受茲室詩稿』巻下、七九頁)には、一九三三年頃、長男一家とともに、生前錢恂も馴染みであったホテルのレストランを訪れ、ビールを飲んだ様子が詠まれている。
- (41) 後年「むすんでひらいて」に改詞された。
- (42) 教育音楽講習会編、三木書店刊。「汽車の旅」(十二〜十三頁)の作詞は橋本光秋、作曲は多梅雅。
- (43) 前掲「単士釐と日本——『受茲室詩稿』と『癸卯旅行記』をめぐる」九七頁参照。
- (44) 蕭氏は、単士釐の筆力について「鋭い観察眼と鮮やかな描写力」と高く評価されている。
- (45) 旅程のあらましは以下のとおり。出発地は、鎌倉付近であろう。汽車に乗って出発し、途中で再び駕籠のようなものに乗りに換えて、金沢文庫方面へ向かった。そこから展望台に昇ったあと、小舟に乗って横須賀を遊覧した。その後、陸に上がって再び汽車に乗って帰り、別れる頃にはすでに日が落ち、空には星がきらめいていた。
- (46) 青山学院ホームページ「青山学院の歴史」参照 (URL: <https://www.aoyamagakuin.jp/history/>)。最終確認日＝二〇二〇年十月九日。
- (47) 鎌倉の別荘は、松葉ヶ谷にあり、住所は鎌倉町大町字夏越坂一九一〇番地であったという(高崎宗司『津田仙評伝——もう一つの近代化をめざした人』、草風館、二〇〇八年、一〇六頁参照)。

- (48) 『論語』顔淵篇による。
- (49) 麻生幸二郎『産業界の先駆宇喜多翁』（宇喜多秀穂翁記念伝記刊行会、一九三一年）参照。引用箇所は一五六頁にある。
- (50) 『東京朝日新聞』一九〇〇年五月十八日一頁第六段「清国人の来遊」参照。
- (51) John Stuart Mill 原題“The Subjection of Women”。日本語訳本に深間内基訳『男女同権論』（東京書林、一八七八年）、大内兵衛・大内節子訳『女性の解放』（岩波文庫、一九五七年）などがある。
- (52) 「在本邦清国学生監督者派遣の件」に「今般清国ヨリ在本邦学生ノ総監督トシテ工部主事夏偕復又南洋湖北留學生事務処理ノ為メ錢恂ノ兩名ヲ派遣候」とある。『JACAR（アジア歴史資料センター）RefC04013638600』壹大日記 明治三十二年九月（防衛省防衛研究所）参照（最終確認日＝二〇二〇年十月二日）。
- (53) 一九〇一年八月に離任帰国（「夏偕復」、『JACAR（アジア歴史資料センター）RefB16080994200』在本邦各国公使館員任免雑件 支那之部 第一卷／支那之部 第一卷（6-1-8-2_9_001）（外務省外交史料館））、一九〇二年十二月二十三日『東京朝日新聞』一頁に來日記録がある（最終確認日＝二〇二〇年十月二十二日）。一九一六年十二月の時点では駐米公使であった。その後、実業界に転じたようである。一九二四年十一月時点では、日本に石鋳石を大量に輸出していた漢冶萍煤鉄公司の総経理（＝社長）であった。「漢冶萍煤鉄公司借款關係雑件 第二十八卷 分割一」、『JACAR（アジア歴史資料センター）RefB04010800100』漢冶萍煤鉄公司借款關係雑件 第二十八卷（1-7-1-9_028）（外務省外交史料館）参照（最終確認日は、前に同じ）。管見の限り、その後の動向は未詳である。
- (54) 原文は「夏夫人携女循蘭才九歳、在日本華族女学校。現值放假、故随父母来遊」。
- (55) 『浙江潮』第三期附録（一九〇三年三月）、七頁参照。この時の女子留學生は三名で、包豊保は「錢包豊子」と記す。ほぼ同時期に作成された「日本留学中国學生題名録」（「清末民初洋學學生題名録初輯」、〔台湾〕中央研究院近代史研究所、一九六二年）には夏循蘭の名はない。
- (56) 金亀山与願寺として設けられていた宿坊を、明治の神仏分離によって、旅館に変更し開業した。現在は、石燈籠や池が残っている。
- (57) 錢恂詩の第五十句に「恤周枉自煩嫠婦（恤周し枉自として嫠婦を煩はせり）」とある。
- (58) 明治時代、一八七〇（明治三）年施行の新律綱領では、妻と妾ともに二等親と定められ、一夫多妻制が公認されていた。その後、西洋に倣う観点から見直しが提唱された。一八九八年に民法で正式に重婚が禁止され、戸籍法でも「妾」

が削除された。日本の皇室も明治天皇まで側室制度を持っていたが、大正天皇以降廃止された。

(59) 『癸卯旅行記』三月五日(五日)に「午後二時抵硤石」、同月六日(陽四月三日)に「晚乘月率朝日婢步行至東南湖母舅家」とある(三六頁)。

(60) 『錢玄同日記』上巻、一九〇五年十二月九日に「余今日将由上海至日本矣。是行凡六人、大兄、大嫂、兄妾朝日、董佃士、金莊康及余也……凡占兩間。兄、嫂、朝日三人居一間、董、金二君及余居一間」とある(北京大学出版社、二〇一四年、九頁)。

(61) 本詩第三十六句自注に「時夫子率湖北諸生東渡留学(時に夫子、湖北の諸生の東渡留学を率ゆ)」とある。

(62) 『樂府詩集』卷二十八(中国古典文学基本叢書、中華書局、二〇一七年)による。原文は「東方千余騎 夫婿居上頭(東方の千余騎 夫婿上頭に居る)」。戦国時代の趙国の女性、秦羅敷の故事にもとづく。一名「艶歌羅敷行」、「日出東南隅行」ともいう。松家裕子「陌上桑」をめぐって(『中国文学報』第三十九冊、中国文学会、一九八八年十月、四六頁)ほか参照。

(63) 「浙江同郷留學東京題名」(『浙江潮』第三期付録、浙江同郷会、一九〇三年三月)参照。錢樞孫、錢稔孫の「到東來日(時期年月)」欄に「(光緒)二十六年四月(一九〇〇年五月)」と記す。このことから、兄弟は両親とともに来日したと判断できる。

(64) 夏目漱石は、同年文部省からの派遣で英国に留学にする際、横浜港から乗船し、九月九日「十時神戸着上陸諏訪山中常磐ニテ午餐ヲ喫シ温泉ニ浴」した(漱石全集)第十三巻、岩波書店、一九七五年、七頁)参照。この頃、神戸市の諏訪山付近に温泉料亭が約二十軒あった。「ぶらり諏訪山町 歴史探訪」(『図書館だより すわやま』第二三三号、神戸山手大学・神戸山手短期大学図書館、二〇一三年四月)参照。

(65) 「蒹葭」は「菁莪」の誤りかもしれない。「蒹」は草が盛んに繁るさまを意味する「莪(つのよもぎ)」で、熟語「蒹葭」の用例は殆ど見当たらない。「菁莪」は『詩経』小雅「南有嘉魚之什」「菁菁者莪」を典故とする語で、人材育成を意味する。「菁莪」だとすれば、ここでは人材を育成する者(錢恂を指すだろう)。「械櫟」は『詩経』「大雅 文王之什」の編名で、序文に「械櫟、文王能官人也(械櫟は文王能く人を官する也)」、毛伝に「山木茂盛、万民得而薪之、賢人衆多(山木は茂盛し、万民得て之れを薪し、賢人は衆多なり)」とあり、賢才の多いことの喩えとして用いられる。「奚囊」は、『新唐書』卷二〇三李賀伝「每旦日、出騎弱馬、從小奚奴、背古錦囊、遇所得、書投囊中(每旦日、出でて弱馬に騎し、

小奚奴を従へ、古錦囊を背にさす。得る所に遇へば、書して囊中に投ず」による。中唐の詩人李賀が従者に錦囊を背負わせ、詩ができると書いてその中へ投げこんだという故事。

(66) 津田梅子は、七歳でアメリカに留学したため、日本語よりも英語が得意で、公式の場では英語を使っていたという。

(67) 『癸卯旅行記』三月十六日に「此次十人登陸、只予一人通語言、又未先告外務省、不得不親入税関」(三九頁)、四月二十一日に「又一等乗客之駐長崎英領事亦得一室。領事善東語、且通東文。隣室相近、知予能東語、願相見、遂略談」(八四頁)とある。

(68) その後『東京朝日新聞』にも転載されている。

(69) 『癸卯旅行記』、七九頁。

(70) 『單騎遠征録』、「駐馬觀光」、二七七頁。

(71) 博文館、一八九三年刊に拠った。一九〇〇年刊の『新選家政学』(金港堂)は、上の巻Ⅱ一二二頁、下の巻Ⅱ一四四頁。

(72) 両書巻頭に「錢単士釐訳述」と記す。

(73) 下田歌子の中国語勉強会参加者の一人、辺見勇彦は、その後上海に渡った。辺見が一九〇二年に作新社を興すと、下田歌子は、これを支援した。作新社は、雑誌『大陸』のほか、下田歌子の著書を漢訳出版し『下田歌子伝』第十一章第四節四二四〜四二八頁、及び「年譜」七五七頁参照。たとえば北京の中国国家図書館は作新社刊『家政学』を蔵する。

(74) 旧岡山藩主池田茂政の娘に信子(一八八四年生、のち佐々木祐哲夫人)がいるが、なお未確定である。

(75) 『癸卯旅行記』二月二十日参照(二九頁)。原文は「寺僧以古法烹茶進。昔在愛住女学校校長小具貞子家曾飲之」。

(76) 第十卷第一一〇号、尚綱社、一九〇一年十二月十五日。

(77) 錢尙と単士釐は、ロシア出発前に大阪の内国勸業博覧会を見学したが、そこまで包豊保を同伴した。時任たけ子は、単身大阪から戻って来る包豊保の東京駅まで迎えを夫妻から依頼されていた。時任たけ子は「神戸の基督教女学校出身で非常に英語が巧く、しかも漢学の素養もあり、加えて五尺七寸といふ大女で、実践女学校の寄宿舎舎監として、先生の片腕となつて働いてゐた」という(『下田歌子先生伝』、故下田歌子先生伝記編纂所、一九四三年、四二五頁参照)。なお、『癸卯旅行記』は「時任竹子」と記す(「竹」は「たけ」の音訳であろう)。本稿は『下田歌子先生伝』(「たけ子」に従った)。

(78) 鈴木智夫氏は、この人物を柳原燐子(白蓮)と推定しておられるが(四七頁)、当時は北小路資武の妻として京都在住中であり、該当しないと思われる。

- (79) 一宮操子『蒙古土産』（実業之日本社、一九〇一年）、同「私の歩んで来た道——青春を蒙古に捧げて」（『婦人公論』二四卷十二号、中央公論社、一九三九年十二月、一三〇〜一五二頁）参照。結婚改姓後の著であるため、姓は河原ではなく一宮となっている。
- (80) 前掲一宮操子「私の歩んで来た道——青春を蒙古に捧げて」、二三六頁参照。
- (81) 鈴木智夫氏は、「下田歌子などより河原操子という日本人が上海の務本女学校で唯一の女教師として中国の女生徒の教育に従事していることを知らされたためだろう」と推測された（一八八頁）。
- (82) 同書の下田歌子「序」に「上京以後渡清以来の日記を訂正し、将に梓にせんとするに及び、来たりて余に其ゆゑよしを序せんことを請はる。余巻をとりて之を閲するに、戦時の事は大半公事の秘密に關するが為め、すべて削除せざるを得ず、故に文はただ皮を余して肉と骨とえお除却せしが如き感なき能はず」と記す。削除した内容は、主に日露戦争関連の機密事項であると思われるが、それ以外にも不都合箇所が見直された可能性が残る。なお、本書には福島安正も揮毫している。
- (83) 前掲『下田歌子伝』第十一章「支那留學生の教育」の「第一節 蒔かれし種子」に「明治三十四年、辛丑の歳、一人の清国女學生が、ゆくりなくも麹町元園校舎に入学した。彼女は最初その父兄に伴はれて日本に來り……すでに日本語も相当に話せる」（二三三頁）とある。この中国人留學生が、父兄に従つて來日し、すでに日本語能力を備える点は、包豊保と一致する。また、卷末「年譜」には「秋、清国女子一名帝國婦人協會附属學校に入学す」と記す（七五六頁）。なお、一九〇四年七月中国人初の卒業生として、陳彦安とともに錢豊保の名が記されている（同三九八頁）。単士釐たちが、ロシアへ出發後、包豊保は、拒俄運動（反露運動）に参加した。下田歌子は、この活動を好ましく思わなかった。このほか、下田歌子は、秋瑾（一八七五〜一九〇七）が実践女學校の留學生であつた事実を公表しながらなかったとの逸話もある。

本論文は、令和二年度科学研究費助成事業・若手研究・助成番号二〇K一二九四七「単士厘の文学活動に関する研究——日本滞在中の詩歌を中心として——」の成果の一部分である。